

平成21年 6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520558
 研究課題名（和文） 第二次世界大戦期における中欧社会主義者の反ナチ抵抗運動と戦後ドイツ構想
 研究課題名（英文） Anti-Nazi Resistance Movement of Central European Socialists and their Planning on Postwar Germany during the Second World War
 研究代表者
 相馬 保夫（SOMA YASUO）
 東京外国語大学・外国語学部・教授
 研究者番号：90206673

研究成果の概要：本研究は、ナチスによる弾圧と離散という状況にあつて、ドイツ「第三帝国」に対して抵抗を試みた中欧（ドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキア）のドイツ人社会主義者の運動を相互に比較検討し、それぞれの国内の抵抗運動との関係および戦後秩序の形成、とくにドイツ問題の解決に向けての彼らの対応、ナチズムを克服した後の戦後ヨーロッパに関するそれぞれの構想を明らかにするとともに、それぞれの地域の戦後政治に与えたインパクトを展望した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	1,300,000	0	1,300,000
平成19年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成20年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：(1) 第二次世界大戦 (2) 中欧社会主義者 (3) 反ナチ抵抗運動

(4) 戦後ドイツ構想 (5) ドイツ社会民主党 (6) ゴッペーデ

(7) チェコスロヴァキア (8) オーストリア

1. 研究開始当初の背景

本研究テーマを構想した背景として、「第三帝国」をめぐる近年のドイツと日本における研究動向が注目される。

第一に、近年のドイツにおけるナチ時代

研究は、どちらかと言えば、体制側の弾圧機構（ゲシュタポ）とそれに対する一般市民の動向に注目し、抵抗よりも同調をとりわけ密告監視体制に着目して検討する傾向にある。だが、ポイカートのいう抵抗と同調の間のグレーゾーンの解明はまださ

ほど進んでいない。第二に、ナチスが占領支配においた地域、とくに東欧・ソ連地域における占領支配とそこでのテロ・殺戮機構の実態については、近年とくに研究が進んだ分野であるが、いわゆるドイツ抵抗運動研究では、ドイツ本国およびそれと密接に関係する亡命者の運動にしか焦点が当てられていない。ドイツの占領支配地域をも含めた抵抗運動研究の総合が今後の研究の課題である。第三に、戦後のドイツ問題に関する研究は、中東欧諸地域からの戦後の住民追放という視点から改めて注目されているが、日本では、これまで戦後ドイツ・中欧に関わる構想との関連で、社会主義者の抵抗運動をとりあげた研究は見当たらない。

以上が、国民国家と民族マイノリティに関わる問題群を社会主義者の抵抗に関連させて検討した本テーマの研究史的な背景である。

2. 研究の目的

本研究は、ナチスによる弾圧と離散という状況にあって、ドイツ「第三帝国」に対して抵抗を試みた中欧（ドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキア）のドイツ人社会主義者の運動を相互に比較検討し、それぞれの国内の抵抗運動との関係および戦後秩序の形成、とくにドイツ問題の解決に向けての彼らの対応を明らかにしようとするものである。これまで、それぞれの地域ごとに検討されてきた社会主義者の反ナチ抵抗運動の諸相を比較研究の手続きを用いて明らかにし、ナチス支配下のナチズムを克服した後の戦後ヨーロッパに関するそれぞれの構想を再検討しようとするところに、本研究の最大の特色がある。

3. 研究の方法

本研究的方法的な特色は、何よりも、これまでそれぞれの地域ごとに別個に検討されてきた社会主義者の反ナチ抵抗運動の諸局面を比較検討し、ナチズム後の戦後中欧秩序への取り組みまでを総合して考察したところにある。

第一に、亡命社会主義者の活動は、それぞれの国内の抵抗運動にどれだけ影響力を与え、またどのように国内の動向に左右されたのか、この点の究明は、ナチスへの「同調」・「統合」に強調点がおかれる傾向にある近年の研究を「抵抗」研究の側から逆照射し、その再検討を促すことになる。第二に、ドイツ社会民主党の抵抗運動について、とくに対立する諸派の動向および共産党との統一戦線をめぐっては、研究の蓄積が厚いが、それをオーストリアおよびチェコスロヴァキア（いわゆるズデーテン地方）の抵抗運動と比較検討した研究は、管見の限り、見当たらない。とりわけヴェンツェル・ヤークシュを中心とするズデーテン社会民主主義者亡命指導部の動向については、日本ではまったく紹介されていない分野である。最後に、戦後中欧秩序との取り組みについては、連合国および亡命先の社会主義者の戦後構想と触れ合う側面であるが、これまた十分な検討がこれまでなされてこなかった。その考察によって、第二次世界大戦から大戦後の中欧国際体制のありかたに新たな光を当てることになる。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、以下の三点にまとめられる。

第一に、ヒトラーの権力掌握後、プラハ、

パリ、ロンドンへと本拠地を移したドイツ社会民主党亡命指導部（ゾパーデ）とその周辺に位置した社会主義者たちの抵抗運動を、ドイツ本国における動向、他地域の社会主義者との連携・対立、および戦後ドイツ構想と関連づけて明らかにした。

第二に、オーストリア、チェコスロヴァキア（いわゆるズデーテン地方）のドイツ人社会主義者の抵抗運動のありようを、とりわけ独逸合邦とズデーテン・ドイツ併合（1938年）の後の国内外の状況と関連させて研究し、相互の連携と対立の様相を明らかにした。

第三に、第二次世界大戦中にイギリスに集結したオーストリア、チェコスロヴァキア（いわゆるズデーテン地方）のドイツ人社会主義者の抵抗運動、およびドイツ社会民主党亡命指導部の相互の関係および彼らの戦後ドイツ・中欧構想を明らかにするとともに、それぞれの地域の戦後政治に与えたインパクトを展望した。

以上のように、本研究は、これまでそれぞれ別個に取り扱われてきた社会主義者の反ナチ抵抗運動の諸局面を比較検討し、ナチズム後の戦後中欧秩序への取り組みまでを総合して考察したところに独自性がある。また、本研究テーマと関連して、第一次世界大戦後のドイツ・中欧地域におけるマイノリティ問題の枠組みも明らかにした。今後は、本研究では扱えなかった、戦争末期から戦後にかけてのドイツ人の東部からの追放およびドイツの国境線問題、連合国の戦後構想との関連性などを各国の外交文書をふまえて考察することが課題である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

1. 相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (5)」
『東京外国語大学論集』査読なし，第 78号 (2009年6月公刊予定)
2. 相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織 (4)」
『東京外国語大学論集』査読なし，第 77号 (2008年12月)，pp.153-172.
3. 相馬保夫「戦間期ドイツ・中欧におけるマイノリティ問題の射程——研究の現状」
『東京外国語大学論集』査読なし，第 76号 (2008年6月)，pp.227-239.
4. 相馬保夫「離散と抵抗：ヴェンツェル・ヤークシュ覚書 (3)」
『東京外国語大学論集』査読なし，第 75号 (2007年12月)，pp.153-170.

[学会発表] (計 2件)

1. 相馬保夫「戦間期ドイツ・中欧におけるシティズンシップとマイノリティ——研究の現状」西日本ドイツ現代史学会，2008年3月16日，鳴門教育大学
2. 相馬保夫「ドイツー中 欧ーヨーロッパ：反ナチ抵抗運動の戦後構想」
ドイツ現代史学会，2006年9月21日，唐津シーサイドホテル

[図書] (計 2件)

1. (共著) 立石博高・篠原琢編『国民国家と市民——包摂と排除の諸相』(山川出版社，2009)：相馬保夫「シティズンシップとマイノリティ——戦間期ドイツ・中欧問題の

枠組み」, pp.166-188.

2. (共著) 田村栄子・星乃治彦 編『ヴァイマル共和国の光芒——ナチズムと近代の相克』(昭和堂, 2007): 相馬保夫「民族自決とマイノリティ——戦間期中欧民族問題の原点」, pp.76-116; 相馬保夫「ヴァイマルの残照——反ナチ抵抗運動の戦後ドイツ・ヨーロッパ構想」, pp.314-347

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

相馬 保夫 (SOMA YASUO)
東京外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号: 90206673

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし